

序章

佐賀県の成り立ち



佐賀県の面積は、約2400km²です。
15歳未満人口の割合の大きさは全国3位です。
佐賀県は東京までの直線距離が約900km、大阪ま
では約500kmであるのに対し、朝鮮半島までは約



200km程度と近く、朝鮮半島や中国大陸に、とても近い位置にあります。そのため、古くから外来文化の窓口となってきました。

豊かな自然に恵まれ、農業をはじめとするさまざまな産業が発展しています。また、特色ある歴史と文化を育み、多くの人材を輩出してきました。



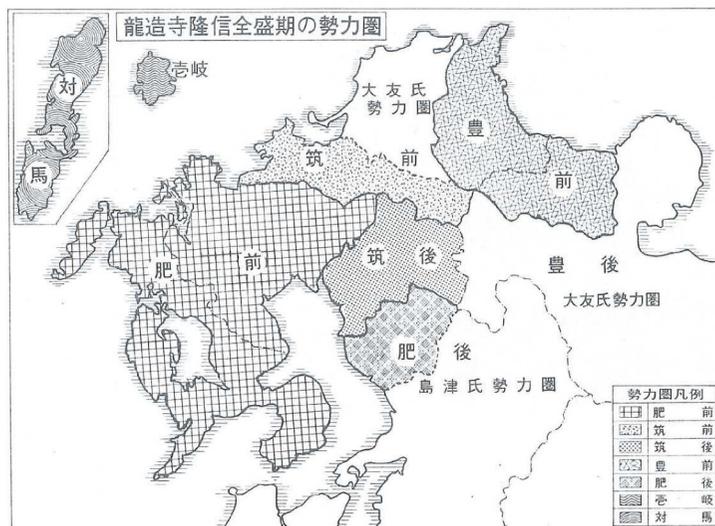
肥前国府跡

律令制下における地方行政機関の中心施設跡である、とされています。

(佐賀市教育委員会提供)

戦国時代までの佐賀県

古代遺跡を見ると、佐賀県の重要性がよく分かります。飛鳥時代には、大陸からの脅威に備える山城が築かれ、奈良時代には、**肥前の国**(現在の佐賀県・長崎県)を統治する役所が現在の佐賀市におかれていました。10世紀後半ごろになると、現在の佐賀県の中にも荘園が成立します。12世紀後半には、平清盛が杵島郡の一部を与えられたという記録もあります。



龍造寺隆信全盛期の九州北部勢力圏

この時代の九州は主に龍造寺氏、島津氏、大友氏によって支配されていました。

(1977年版『佐賀市史』第1巻より)

鎌倉時代の元寇では佐賀の武士らも参戦しました。佐賀は、室町時代以降には主に少弐、千葉、渋川、有馬氏といった有力武士などの抗争の舞台となりました。戦国時代になると、龍造寺氏が九州北部に勢力を広げる戦国大名として台頭し、さらに鍋島氏へと実権が移っていきました。唐津地方では、波多氏が戦国武将として勢力を持っていました。

佐賀県の誕生から廃止・復活

現在の佐賀県は、江戸時代には佐賀本藩と小城藩、蓮池藩、鹿島藩の3つの支藩、唐津藩、対馬藩の飛地・幕領に分かれていました。1871(明治4)年の「**廃藩置県**」では、佐賀県、小城県、蓮池県、鹿島県、唐津県と厳原県(対馬)の一部に分けられました。これらの県は一部統合されたり、一時長崎県に編入されたり、紆余曲折を経て、1883(明治16)年、現在の佐賀県になりました。

多彩な地形・地質と生物

北には対馬海流が流れ漁業資源に恵まれた**玄界灘**、南に干満の差が日本一大きく海苔養殖などが盛んな**有明海**という異なる性質の海に面しています。山地から低平地まで多彩な地形で成り立ち、リアス海岸や白砂青松の海浜、夕日に染まる穏やかな内海、山間部に広がる棚田など、景勝地も多くあります。

北東部の**脊振山地**にある脊振山や天山などは、今から約6500万年前~170万年前にかけて地下深い所でマグマがゆっくり冷え固まってできた花崗岩が隆起してできたと考えられています。



脊振山(中央奥)

福岡県と佐賀県神埼市の境界に位置する山で、古くは信仰の山として多くの修行僧が暮らしていました。

(神埼市提供)



アオハダトンボ
オスの翅が青藍色に美しく輝くトンボです。準絶滅危惧種に指定されています。
(吉田嘉実明氏提供)

この脊振山地から有明海に流れる河川の運搬・堆積作用によって**佐賀平野**ができました。

佐賀平野は、干拓によりその面積が広がってきました。有明海に注ぐ河川は、川底が平地より高いところにあり、生活排水や農業用水が流入しにくく、多くの淡水魚やアオハダトンボなどのトンボが生息しています。

嘉瀬川が注ぐ有明海には、河川から運ばれた、粒の小さな砂や粘土が堆積し、遠浅の干潟が形成されました。**干潟性海産動**

物の宝庫であり、渡り鳥の中継地や生息地にもなっています。

一方、佐賀県の北西部、玄界灘沿岸では、脊振山地の花崗岩が風化した砂が玄界灘に流れる松浦川と玉島川の運搬・堆積作用によって、**虹の松原**など多くの砂浜海岸が形成され、アカウミガメの産卵地になっています。

玄界灘に突き出た**東松浦半島**は、上場台地と呼ばれています。今から約2700万年前に噴出したマグマが急激に冷え固まった玄武岩からできています。溶岩の粘性が弱かったため、楯(台地)状の地形になったと考えられます。海岸線には、海浜性植物や小規模な林が形成されたに過ぎません。また、東松浦半島西部の海岸線は、多くの入り江や岬が入り組むリアス海岸で、漁港や真珠などの養殖地となっています。



オオキツネノカミソリ
花の色がキツネ色で、葉の形がカミソリに似ていることから名づけられました。
(吉田嘉実明氏提供)



クロカミラン
佐賀県黒髪山にのみ自生する珍しい植物です。
(吉田嘉実明氏提供)

佐賀県北西部の唐津市から伊万里市の平地は、今から約3000万年前ごろは暖かくて浅い海であったため、その頃に堆積した砂岩地層からはヨコヤマオウムガイ、ペンギンモドキ、サメの歯、二枚貝など多くの化石が出土します。このうち、唐津市で発見されたヨコヤマオウムガイは、ほぼ完全な形の化石としては日本最大級だとされています。

佐賀県の西部に位置する**黒髪山・青螺山山塊**は、今から約6500万年前～170万年前にかけて噴出したマグマが急激に冷え固まった流紋岩が侵食されてできたものです。岩肌には、カネコシダやクロカミランが自生しています。また、黒髪山の北西方面にある腰岳から出土した黒曜石は、矢じりの原石として、縄文から弥生時代にかけて、西日本一帯に広く流通しました。

佐賀県の南部に位置する**多良山地**は、今から約130万年～100万年前と約80万年～40万年前の噴火の際に、マグマが地表で急激に冷え固まった安山岩から成り、侵食作用によってV字谷が発達しています。その溪流沿いに照葉樹林が発達し、日本では絶滅危惧種であるヤマネ(哺乳類)が生息しています。また、ツクシジャクナゲ、マンサク、オオキツネノカミソリが、開花期に見事な花を咲かせます。



有明海の海苔養殖風景 (有明海漁業協同組合提供)
養殖に使われるノリヒビという竹が、無数に立てられています。

盛んな産業と発達した交通網

大陸棚が続く玄界灘は、豊かな漁場であり、マダイやイカ、ヒラメ、カレイ、クルマエビ、ウニ、アワビ、サザエなどが獲れ、ブリなどの養殖も行われています。有明海は、**海苔の養殖**で知られており、海苔の生産高は全国トップクラスを誇っています。また佐賀県は、米、麦、大豆をはじめ、果樹

などを生産する全国でも有数の農業県でもあります。

さらに、佐賀県では、古くから製造業も盛んで、窯業を筆頭に精蠟^{せいろう}※1や長崎県から入った砂糖を使った製菓業も営まれてきました。また、全国有数の米どころでもあるため、日本酒の醸造も行われました。

現在の佐賀県は、造船、半導体、自動車部品、機械等の製造業が盛んです。

※1 蠟を製造すること。

佐賀県には、長崎本線・佐世保線、九州新幹線・西九州新幹線などの鉄道や、九州を東西南北に走る高速自動車の結節点である鳥栖ジャンクション、重要港湾である唐津港・伊万里港、空の玄関口である九州佐賀国際空港と、陸海空の交通網が整備されており、第一次・第二次産業や観光産業などを支えています。

先端技術の研究は、佐賀大学が取り組んでいる海洋温度差発電や、佐賀県が自治体として日本で初めて設置したシンクロトロン^{せんくろとろん}※2などがあります。

※2 粒子を光速近くまで加速する、円形加速器の一種。